

『都城木刀』の現場 ー荒牧武道具木工所の事例報告ー

對馬陽一郎※

1. 調査の基点

木刀は、剣道などの形稽古に使用される日本刀の模造品である。

剣道の稽古に使用される日本刀の模造品という意味では竹刀と同様の位置にあるものであるが、竹刀が試合や自由に打ち合う相懸かり稽古に用いられるのに対して、木刀は型の稽古に使われる。

剣道の昇段試験には、初段から木刀による形の実技が含まれる。このことから、剣道を始めるのに必要な道具は胴着・袴、防具、竹刀といったところだが、初段を通るあたりから木刀を持ち始める者が多くなる。

また、古流の剣術や柔術などでは、竹刀を用いる流派もあるもののほとんどは木刀を使って稽古する。流派によって木刀の形や長さ・重さ・材質などが異なっており、各流派の木刀はそのまま流派の稽古観を反映していると言っても過言ではない。

それら木刀は、かつては稽古者が自分で削って作ることが多かったようであるが、現在では武道具店で剣道に用いる普及型(*)のものはもちろん、各流派の様式の木刀が揃えられている。

現在日本では、年間で4万5千人前後の人が剣道初段の昇格試験を受けているとい

う。

剣道人口そのものは減少傾向にあると言われているが、それでも毎年それだけの数の人間が本格的に剣道への門をくぐろうと考えていることになる。

それだけの稽古者が必要とする数の木刀の、現在9割以上が九州宮崎県の都城で製作されている。

この調査は、木刀の生産のほとんど全てが九州の一地方都市に偏っている理由と、その製作技術の実際を知るべく行った。

* 全日本剣道連盟では、木刀の寸法について以下のように指示している。

「総尺 太刀三尺三寸五分（約一〇二センチ）柄八寸（約二四センチ）

小太刀一尺八寸（約五五センチ）

柄四寸五分（約一四センチ）」

（「昭和五十六年度十二月七日制定日本剣道形解説書」財団法人全日本剣道連盟編集・発行 2004:p4）

総尺とは柄頭から刃先までの全長を言う。太刀は日本刀のうち、刃部が二尺以上のもの。小太刀は一尺以上二尺以下のものを指す。小太刀は、脇差とも呼ばれる。

※神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士
後期課程

2. 取材対象



工場全景

呼称：(株)荒牧武道具木工所

在所：宮崎県都城市 木工団地と呼ばれる、木工業者が集まる地区の一角にある。

話者：荒牧康雄氏（現社長・三代目）

創業：大正十年

職種：木刀製作

3. 木刀製作の実際

以下は、話者の方にお伺いした話に後述の資料を加えて記す。

●材料

材料は、7割ほどが桜である。話者の言うところによれば、実用品としては国産の白桜が最も木刀には適しているという。堅さ、弾性が適度である他、「ツゲ（ささくれ）

が立たない」とのこと。樹齢は桜の場合、30年以上のものが必要となる。

他に用いられる材料としては、赤桜、枇杷、イス、椿、黒檀、紫檀、鉄刀木（タガヤサン）等がある。

黒檀、紫檀、鉄刀木などは輸入材で、見た目が美しいことから装飾用の木刀に用いられる。

枇杷は密度が高く、堅くて粘りがあり木

刀の素材として極めて優れているものの、大きく育たない性質のため現在は素材が入手し難く、高級品となってしまっている。枇杷の木刀を用いる流派の稽古者は、現在では代わりに椿の木刀を用いることが多いそうである。これは、色ツヤなど見た目が似ているという理由からであるが、実際用いたときの質はやはり枇杷の木刀には歴然と劣るとのことである。

珍しい素材としては、スヌケと呼ばれるものがある。南九州の特産品であるイスの木で、老木が風化して芯の部分が残されたものである。こちらもやはり枇杷と同様の貴重品で、高級木刀となる。

樫、イス、枇杷の産地としては九州産が最も適するというのが、近年は材料が手に入りにくくなったため輸入材も仕入れは始めているとのことだった。

購入の段階で、丸太の選別には気を使う。節がなく、筋がまっすぐ通った丸太が良い。良いものだけを選別して卸してもらうために、ここでは丸太を相場の3倍の値段で購入しているとのことだった。

●製作工程

一．素材の乾燥

自然乾燥で、板の状態の材木を適度な水分の状態になるまで乾燥させる。

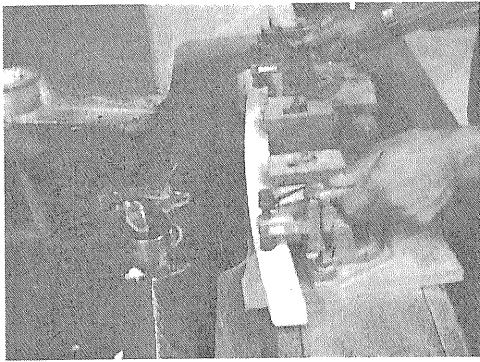
樫の場合は1年で、水分18%の適度な状態となる。乾きすぎると、今度は脆くなって良くないとのこと。

イス、椿などは、最適の状態になるまでに5年かかる。

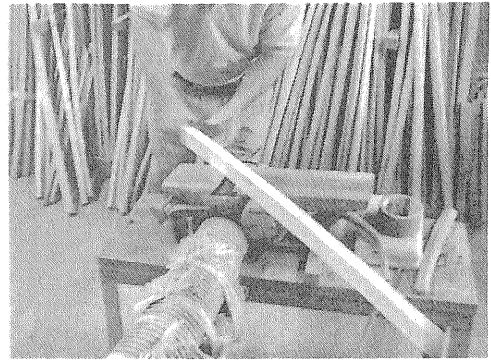
風通しの良い場所であることが重要で、そのため敷地内の駐車場周りの開けた場所



材木を乾燥させるための倉庫



面取り機による現在の面取り



かつての工法

を取り囲むようにして、片面を開けた倉庫が並んでいる。材料は板材の状態で購入し、曲がりが出ないように寝かせた状態で置かれる。

この工場では、自社用の材料置き場を3箇所所有しており、順に使用できるよう時期をずらして材料を仕入れ、乾燥させている。

二．線引き

木目を読み、また節などを避けるように考えて板に線を引き、大体木刀の寸法に板を「わく（割る）」。

三．厚み・長さを決める

木刀の種類に従い、厚みと長さを取る。木刀は柄、刃、刃先とそれぞれ厚みが異なる。現在は型が出来ており、正確な厚みに仕上げる事が出来る。

四．面取り

面取り機と呼ばれる機械で、型取りして大まかな姿に仕上げる。日本刀独特の反りは、この工程で出来る。木刀の場合、八角柱の形に削る。

三～四までの工程は、25年前に現在の機械を導入するまでは、上向きの電動カンナを用いるだけで、形を整えるのは全て職人の技量頼りであった。面取り機の導入により、今まで8割が手作りであったところを現在では逆に8割の工程を機械化することが出来ているとのことである。

現在この工場では、機械を使わず手でこの作業を行える職人は社長を含め二人しかいない。

五．鉋で姿を作る

鉋がけの作業は、特に熟練した職人が行っている。

面取りをした木刀の前後を万力で固定し、鉋で形を仕上げる。この部分には電気カンナのような原始的な機械でも導入できず、完全に手作業になる。前後を万力で挟み、空中に浮かせたような状態で作業をするこのアイディアは九州特有のものではないか、とのことだった。この状態で削ることにより、木刀の反りを自在に出すことが可能となる。

鉋は、作業用に改造されている。材木と



4～50種の鉋を使い分け、木刀の姿を作る。

直接当たる部分に「イレクチ」といって、元の素材よりも堅い材質の木をはめ込んで強化しているのである。鉋は、一人につきだいたい4～50種のを使用する。大まかに分ければ底が平らな板ガンナ、底に丸みのある反りガンナ、仕上げ用に用いる仕上げガンナの三種になるが、これにそれぞれ使用する職人が工夫を加えて各作業に適した形にしているのである。鉋のメンテナンスは全て職人が自分で行っているため、職人の鉋は一人一人専用のものとなっており「クセ」がついてしまっていて他人には扱えないという。

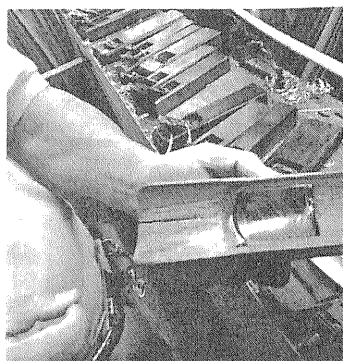
六．磨き

ペーパーで磨きを入れ、ツヤを出す。

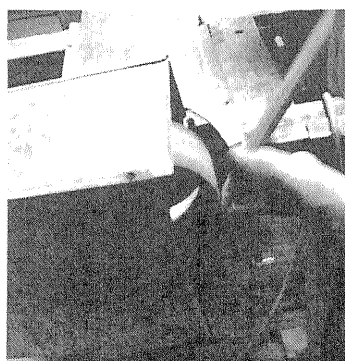
七．切っ先を入れる

流派によって切っ先の形は様々に異なる。この部分も完全に機械化は出来ず、電動カンナを用いて職人の技量に頼る作業になる。

「木刀は切っ先三寸が命」といい、この部分だけはこの後どんなに技術が進んでも機械化は不可能だろうとのことだった。



イレクチ



図面などはなく、何種類もの記憶して作る。

切っ先を任されるには、職人の修行は必要とのことである。

八．塗装・パッケージング

必要な種類の木刀には塗装を施す。その後、専用の機械でパッケージングして出荷する。

現在この工場では、10人の人手を生産する。

現在の機械を導入する以前は、1人の人員を雇い日に27～30本が限られていたとのことである。

4. 技術伝承

戦後は徒弟をとったものの、現在はその制度はない。

技術の習熟に合わせて段階を経て難しい仕事を任せるため結果として分業の状態になってはいるが、話者は工程を流れ作業的なものにするつもりはなく、新人もいずれ全ての作業を自分で行える職人にするつもりで育てているという。

習熟の課程としては、まずペーパーによる仕上げの磨きの作業を修行する。これを2年ほどしたら、次に切っ先を作る段階に移る。

自分の鉋を持ち、全体の形の仕上げを任されるようになるのは、最短でも十年の修行が必要とのことである。

話者が語るところによれば、新人にはまず「木刀と一緒に寝ろ」と言うそうだ。寝ていても木刀のことを考えるくらいになれば、ということであろうか。また、「『就職活動』のつもりで来る人は、大抵すぐやめてしまう」という話もあった。

とりあえず一通りのことが出来るようになるまで、最短で5年。一人前になって自分の鉋を持つようになるのが10年とのことである。

5. 信仰儀礼等

山林業に関わる人々全般に信仰される対象として、「山の神（ヤマノカン）」がある。

宮崎県史では、山の神を以下のように説明する。

「山林業に関わる人々を守護する神で、小さな祠を建てたり大木・岩などを御神体として祀ったりする。林業関係者や猟師は作業の安全や豊猟を祈念して正月・五月・九月の十六日に山の神祭りをする。この日は山の神の洗濯の日、地獄の釜の蓋が開く日などといい、山中に入ってはならないとされている」（『宮崎県史 資料編 民俗1』宮崎県編集・発行 1992:329p）

当工場でも、木工業に関わる業者としてこの「ヤマノカン」を1・5・9月の16日に行っている。

焼酎・米・塩を神棚と、機械の一台一台に置いて作業の安全を祈る。「生き物である木を扱ってるから」との理由とこのことで、木の供養を兼ねているのだろうか。

かつてはこの日は作業を休み、一日酒宴を開いたそうである。現在では、仕事を休みはしないものの上記のような儀式を行い、従業員には帰りにツマミのようなものを持たせるそうだ。昔はどこの木工関係者もやっていたとのことであるが、今ではこれをやる業者も少なくなり「このあたりではうちだけじゃないか」と云う。

6. 技術伝承上の問題点

現状、この仕事を続けるにあたって、問題点は大きく二つ挙げられる。

第一に木刀に適する木の種類は広葉樹であるが、近年これらの種が手に入りづらくなっている点。

杉や檜などの針葉樹は国費を投じて切り出されているものの、檜等は「雑木」とし

ての扱いで余り注目されていないためであるそう。また、近年の自然保護のスローガンもこの材料不足に拍車をかける。

そのためこの木工所では、広葉樹を増やすための運動に積極的に参加している。宮崎を拠点とする「どんぐり1000年の森をつくる会」では広葉樹の植樹活動を行っており、県内の関係する多くの企業がこれに参加している。元来が広葉樹林の多い地域であったため、その環境に適した事業を行っていた業者が元の環境を求めることは頷ける。木工業者の他、広葉樹林が生み出す上質の水質を求める酒造業・水産業の関係者もこの運動に参加しているとのことであった。広葉樹は一度育てば伐採しても残った切り株から自然に芽が生えてくるとのことで、このサイクルを作り上げるのが目標であるそう。

第二に、剣道人口自体が少なくなっている点である。この20年で、木刀の出荷は約2/3ほどになっているとのこと。話者によれば、教育現場における武道離れがもっとも問題ではないか、とのことである。武道を取り入れるには学校側で武道場や防具・竹刀等の道具を揃えねばならず、予算がかさむ。そのため、武道の取り入れに二の足が踏まれているのではないかと、ということだった。最盛時には25～6軒あった木刀業者も、現在は4軒になってしまっているとのことである。全国シェアの9割を、現在この4軒で賄っているわけである。

第一、二の点どちらにも、行政のあり方によって大きく左右されるという共通点がある。

この工場では銃剣道向けの本銃も取り扱

っているが、イラク派遣時には毎年催されていた銃剣道大会が開催自粛され注文数が激減したということもあったそう。特に政変著しい昨今は、政治の動きに神経を使うことになる。

7. 付記

日本の木刀生産の殆どを担う都城の木刀産業は、大正十年、荒牧武道具木工所の設立者である荒牧和三氏が福岡県から宮崎県の都城に移って木刀製作を始めたことがその起源となる。当時、都城には軍需に応じて大量に樫材が流れており、これを主な材料とする柄木（農具の柄）産業が隆盛していた。おそらく和三氏も、同じく樫で作られるものの多い木刀の材料を求めてこの都城に拠点を移したものと思われる。戦後は一時、GHQの武道禁止政策により廃業を余儀なくされたものの、この禁令が解かれると俄かに木刀の需要が増加した。荒牧武道具木工所の現社長である荒牧康雄氏に伺うところによれば、このとき、東京の大手スポーツ用具企業の会長が直々に都城まで出向いてきて、木刀の生産を依頼に来たと云う。また、農具の需要低下に伴い柄木屋から木刀製作へと転換する業者も多く現れ、荒牧氏も弟子入りを希望する業者は積極的に徒弟に取って技術を広め、全国からの需要に応えた。

結果として都城に木刀産業が集中することになった理由は不明であるが、おそらくは原料である樫材の不足によるものと思われる。大規模建築などには向かない材質で

ある樫には大口の需要がなく、採算が合わないために取り扱う林業者も少なくなる。都城で樫材が多く出回ったのは軍需による大量の需要があったためだが、戦後はそれもなくなったために樫材の供給は激減し、現在の都城の木刀業者は材料不足に悩んでいる。

剣道は無論として、現在日本に残る古流

の武術においてもその殆どが、稽古用の木製武具類の供給を都城に頼っているのが現状である。流派ごとに異なる木刀の製作法はほとんど職人の頭の中にあり、仮に現在の木刀作りの流れが途絶えれば、後世の再生は困難である。木刀産業の危機はその業界のみならず、日本の武術の継承そのものを揺るがす問題となり得る。

学界消息

中国民俗学会・北京民俗博物館 主催 “東岳文化與大衆生活” シンポジウム

近年中国民俗学界内外の注目を集める「東岳論壇」国際シンポジウム（北京市朝陽区政府後援、中国民俗学会・北京民俗博物館主催）は、例年通り「春節」を控えた1月29～31日に北京で開かれた。台湾・日本・韓国・ドイツ・フランスなどの外国や中国各地から数十名の研究者が集まり、講演や研究発表を行なった。

この国際シンポジウムは、2005年第1回会議が開催されて以来、年に1回開かれ、今年は通算4回目となる。シンポジウムの一回目と二回目のテーマ、『民族国家の暦日—伝統節日と法定休日』は、学界内外に反響が大きく、マスコミにも大きく取り上げられ、一般の人々の関心も集め、大きな成果を取めた。その影響が一つの要因で、政府の政策及びその実施状況の審議や国の立法などにかかわる「全国政協」（全国政治協商会議）、「全国人大」（全国人民代表大会）の議員たちが中央政府に伝統文化政策の改善を求め、大晦日、「清明節」、「中秋節」を公式に国民祝祭日に定めるよう提案し、2007年暮れに、国民祝祭日条例が改定され、大晦日、「清明節」、「中秋節」が国民祝祭日として認められた。

シンポジウムの今回のテーマは、「東岳文化與大衆生活」で、題のとおり泰山信仰（東岳文化）と民衆の生活との関係について、さまざまな議論が交わされた。

周知のとおり、中国において、民族・民俗信仰は、共産党のイデオロギーによって、長い間「迷信」とされ、批判を浴び、取り締まりの対象とされてきた。1980年代以降、

政府の民俗信仰に対する対応はトラブルを引き起こさない限り大筋では大目で見えるようになったが、政府が正式に民俗信仰に対する「迷信」視をやめたわけではない。その関係で、地方では最近まで民衆が自発的に建てた信仰施設を取り壊したり、建設を許可しなかったりするようなことがしばしば起きている。今回首都北京の区政府が後援したシンポジウムで民俗信仰（泰山信仰）と民衆の生活を堂々とテーマにして議論したことは、意義深いものであり、会議活動の一つとして、「北頂娘娘廟」を見学したのも興味深いものである。

この「北頂娘娘廟」は、最近修復されたもので、民俗信仰としての泰山信仰の重要な側面である女神「碧霞元君」を祭る廟である（歴史上皇帝が泰山で「封禪」儀礼を行ない、「天」を祭ったので、泰山信仰は国家的信仰の側面を持つのである）。廟は、北京オリンピックのメイン会場である「鳥の巣」と「水立方」と呼ばれる水泳館建設用地の中心に位置するので、「水立方」の建設の邪魔になり、本来は取り壊されるはずだった。しかし、政府はこの廟を残すために当初の計画を見直し、用地を大きくずらした。国家的プロジェクトで民俗信仰施設を顧慮するようになったのは、近年の民族・民俗文化の価値を見直す流れの中にあるものだが、「北頂娘娘廟」の事例は、各地の経済開発による民俗信仰や伝統文化関係施設の破壊を一考しその歯止めの好例となるであろうと期待される。（蔡 文高）